

宮崎大学 GIAHS 研究会の取組と異分野連携研究への示唆

西和盛・近藤友大・芦田裕介・井上果子・撫年浩

Discussion on Interdisciplinary Research Collaboration
through a Case of Miyazaki GIAHS Study Group's Initiatives
Kazumori NISHI, Tomohiro KONDO, Yusuke ASHIDA, Kako INOUE, Toshihiro NADE

はじめに

2016年4月に宮崎大学に開設された地域資源創成学部（以下、地域学部）は、異分野融合を軸とした教育・研究を目指している⁽¹⁾。しかしながら、それを担う教員が必ずしも適切な方法で異分野融合型の教育・研究を実行できるわけではない。それどころか、異分野融合型の教育・研究とは何かということすら明らかではなく、試行錯誤の末に現在に至っている。はじめに、学部開設に先立って立ち上げられた地域資源創成研究センター（以下、センター）時代（2015年4月～2016年3月）からの取組を、筆者が把握している限りにおいて、簡単に振り返ってみよう。

教育面では、たとえば、以下のような手法が試みられてきた。学生に異分野融合・異分野連携・学際⁽²⁾といった概念を意識づけるコマを設ける（2017～2018年度：専門教育入門セミナーR（1年後期））、オムニバス形式の講義に多様な視点をもたせるようなしなかけを盛り込んだ授業計画をたてる（2017～2018年度：地域産業創出概論（1年後期）、地域創造概論（1年後期））、同一の対象を異なる視点から切り取るような連携講義を実施する（2017～2018年度：地域産業創出概論（1年後期））、講義間の連携を考慮しながら各講義を計画する（2017年度：情報・数量スキルR（1年前期）、大学教育入門セミナーR（1年前期）、地域理解実習（1年前期）、専門教育入門セミナーR（1年後期）、地域探索実習I（1年後期））、などの工夫である⁽³⁾。本稿では、これらの教育の効果について詳細な評価することはしないが、ひとつだけ課題を指摘しておくならば、教育の質を継続的に保証していけるかという問題がある。上記の科目の中には、毎年、担当教員が変わるものが多いことから、誰が担当しても同質の教育が提供できるよう、学部教員全体で異分野連携教育の意義を確認しあい、効果的なカリキュラム編成を体系的に構築していく必要があるだろう。また、大学における教育が、教員の専門分野における研究をベースに行われることも見逃してはならない。すなわち、異分野融合型の教育を実施していくにあたっては、教員自身が異分野連携研究に携わっていくことが必須といっても過言ではない。

次に、研究面でのこれまでの取組をみてみよう。まず、センター・学部内の自主的な取組として、研究マッチング会が定期的で開催された（2015～2016年度）。この取組においては、各教員の研究分野や具体的な研究実績に関する情報が共有され、相互理解が深まったという意味において、大きな前進であった。その一方で、新しい研究計画案が具体的に議論されたわけ

ではなく、異分野連携研究の立ち上げ方に課題を残した。振り返ってみると、この時点では、異分野との具体的な連携の姿が思い描けなかったり、着任間もない教員が多く、共同で研究すべき対象が見いだせなかったりしたのであろう。その後、学内経費である戦略重点経費（学長裁量経費）の公募をきっかけに、いくつかの共同研究が立ち上がった（2016年度～）。ただし、これらの多くは、大きな共同研究計画を描きつつも、実行レベルでは、研究者各自が独立した研究を行い、それらを寄せ集めているに過ぎなかったようである。そのほかに、科研費をはじめとした外部資金への応募や地域からの受託研究などを契機として、いくつかの共同研究が立ち上がっている。ただし、これらの研究で一定の成果が上がるケースというのは、多くの場合、隣接分野による連携であり、従来の学際研究を超えるようなものではない。以上のように、異分野連携研究の取組自体はいくつもみられるが、その実行にあたっては、研究組織が大きくなるほど、また、全体テーマの抽象度が高まる（連携分野同士の専門性が遠い）ほど、多くの困難を伴う傾向にあるようである。つまり、まったく異なる分野の教員が集まる地域学部において、異分野融合型の教育・研究を目指すのに困難が伴うのは、なかば宿命的なことである。

本稿では、異分野連携研究の事例として宮崎大学 GIAHS 研究会の取組を整理するとともに、地域学部において求められる異分野連携研究のあり方について考察を加える。GIAHS 研究会は、分野の重複がほとんどない、比較的メンバーの多い研究組織であるが、2015年11月の活動開始以降、現在にいたるまで活発に調査・研究を継続している。このことから、当該事例は、地域学部における異分野連携研究に多くの示唆を与えてくれる可能性がある。

1. 宮崎大学 GIAHS 研究会の取組の概要

1.1 宮崎大学 GIAHS 研究会発足の経緯

宮崎大学 GIAHS 研究会（以下、GIAHS 研）は、宮崎県の GIAHS（Globally Important Agricultural Heritage System, 世界農業遺産）認定サイトを対象として、その遺産的価値の科学的根拠を明らかにすることを主な目的とした研究グループである。GIAHS は、FAO（国際連合食糧農業機関）が2002年に創設した認定制度で、①食料及び生計の保障、②農業生物多様性、③伝統的な知識システム、④文化、価値観及び社会組織、⑤ランドスケープ及びシーンスケープの特徴の5つの認定基準が設けられている。2015年12月、宮崎県北部に位置する高千穂郷・椎葉山地域（高千穂町、五ヶ瀬町、日之影町、諸塚村、椎葉村）が、GIAHS サイトに認定された。具体的な名称は、「高千穂郷・椎葉山地域の山間地農林業複合システム」である。詳細は省略するが、GIAHS は上記の認定基準を満たした「システム」である必要があるため、その理解や評価が一面的であってはならない。そこで、GIAHS 研は、異なる専門分野をもつ研究者によって構成される研究組織となっている（表1）。

GIAHS 研は、ゆるやかに組織されていったが、その経緯について振り返ってみると、2015年11月までさかのぼることができる。農学部の藤掛が、センターの西、芦田、産学・地域連携センターの早川（当時）、農学部の山本（農業経済学、2回目まで）、狩野、大地に声をかけ、「農山村に興味を持つ若手研究者の交流のための会」と称して情報交換したのが最初であり、何か新しい研究や議論を共同で行っていくことを確認した。翌1月に、第2回目が開催されることとなったが、このときに初めて GIAHS の話題がでることとなる。産学・地域連携センターで GIAHS 対象地域の調査を受託していたことから、早川が情報提供を行うかたちで紹介された。このとき、地域学部から近藤、井上が加わり、会の名称が「農山村を愛する会（仮）」となっ

た。第3回は、2月に諸塚村に現地視察に行くというかたちで開催され、GIAHS 地域の一部について理解を深めた。第4回(4月)は、GIAHS 地域を中心に各自の関心について報告を行った。あわせて、2016年度の戦略重点経費に応募してみてもどうかということが議論され、藤掛を研究代表者として計画案を作成することとなった。また、この申請をきっかけに、農学部から竹下、地域学部から撫が新たに加わった。第5回は、8月に企画され、研究や実践の報告が行われた。その後すぐに第6回(8月)が行われることとなったが、このときから「宮崎大学 GIAHS 研究会」「宮崎大学 GIAHS 研究グループ」と記載する場合もある)に改称し、これ以降、月例研究会が開催されることとなった。研究会が実質的な研究組織として動き出したのはこの時期からで、調査・研究の方向性も具体的になってくる。2017年度から、農学部の西脇、櫻井が加わり、年度途中からオブザーバー的ではあるが南九州短期大学から金が新たに加わり、ほぼ現体制となった。

表1 GIAHS 研究会の研究組織

氏名	専門分野	主な研究テーマ	関連する認定基準 ^{注1}
藤掛一郎	林業経済学	農林複合経営の特徴の整理 林業経営の意思決定の変遷	1,4
西和盛	農業経済学	農業経営の意思決定の変遷 釜炒り茶の残存要因の解明	1,3
撫年浩	畜産学	畜産経営の特徴の整理	1
井上果子	農村計画学	神楽継承の現代的意義の整理	1,4
狩野秀之	農業経済学	農林複合経営の実態の把握	1,3
西脇亜也	生態学	生物相の特徴の把握	2,5
竹下伸一	農業土木学	山腹用水路の特徴の解明	3,5
櫻井倫	林業工学	モザイク林相の実態の把握	3,5
近藤友大	作物栽培学	土壌化学性からみた焼畑の評価	3
芦田裕介	農村社会学	集落社会基盤・地域資源の概況の把握	3,4
早川公	文化人類学	集落社会基盤・地域資源の概況の把握	3,4
大地俊介	森林社会学	集落社会基盤・地域資源の概況の把握 フォレストピア経験の掘り起こし	4
金湛	経済学	(オブザーバー)	1
小岩崎規寿	県庁職員 ^{注2}		
津隈祐喜	県庁職員		

注：1)「関連する認定基準」の数字は、それぞれ1：食料及び生計の保障、2：農業生物多様性、3：伝統的な知識システム、4：文化、価値観及び社会組織、5：ランドスケープ及びシースケープの特徴を示す

2) 県庁職員は、異動により変更の可能性がある

1.2 GIAHS 研究会の主な活動と成果

GIAHS 研では、原則として、各研究者が割り当てられた役割に応じて、調査・研究を進めていく。年度ごとの研究課題を表2に示す。2016年度の大きな進展としては、センサスデータを用いて、全国における高千穂郷・椎葉山地域の特徴を描き出したこと、5町村全体に共通

の集落アンケートを行ったことである。2017年度は、集落アンケートを分析し、地域の社会組織や伝統芸能などの変化の様子を描き出した。他にも、GIAHS申請時に遺産的要素とされていた焼畑や山腹用水路などの客観的なデータを分析することで、遺産的価値についての評価を行ってきた。このように、2016～2017年度は、地域の姿を大まかに描き出すことが主な課題となっており、2018年度には、研究課題が詳細なものになっているものもある。さらに、研究の蓄積が進んでいったことで、地域へのフィードバックとして出前講座や中学生向けのリーフレットづくりなどにも着手している。

表2 GIAHS 研究会における研究課題と担当研究者（2016-2018年度）

年度	研究テーマ	研究担当者
2016	全国における農林複合経営卓越地域の抽出と GIAHS 地域の特徴	藤掛, 撫
	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の概況把握	芦田, 近藤, 早川
	土壌分析による焼畑農法の評価	佐伯雄一 ^注
	GIAHS 地域における棚田および山腹水路の歴史と地形的特徴に関する研究	竹下
	GIAHS 地域における茶業経営に関する調査	西, 狩野
	GIAHS 地域内の学校教育における伝統継承等に関する調査	井上
	地域資源としてのフォレストピア経験の記録	大地
	集落カードを用いた農林複合経営の実態把握	藤掛, 西, 狩野
	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の実態把握	芦田, 藤掛, 大地, 近藤
	椎葉村日添地区における焼畑の土壌分析による評価	佐伯, 近藤
2017	山腹用水路の地形的特徴の解析と他地域との比較	竹下
	GIAHS 地域における林内路網の特徴と他地域との比較	櫻井
	動植物のモニタリング調査による対象地域の生物相の特徴把握	西脇
	GIAHS 地域における茶業経営に関する調査研究	西, 狩野
	GIAHS 地域の肉用牛生産の特徴	撫
	神楽継承に関する調査研究	井上
	農林業複合経営の実態に関する研究	西, 藤掛, 井上, 撫, 狩野
	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の実態把握	芦田, 藤掛, 大地
	椎葉村日添地区における焼畑の土壌分析による評価	近藤
	他地域用水路と比較した GIAHS 地域山腹用水路の特性に関する研究	竹下
2018	GIAHS 地域における「モザイク林相」の実態と観測箇所の把握	櫻井
	動植物のモニタリング調査による対象地域の生物相の特徴把握	西脇
	神楽継承及び食と農のつながりに関する調査研究	井上
	出前講座プログラムの構築	全員
	中学生向けの GIAHS に関するリーフレット教材の開発	全員

資料：協議会からの受託研究計画資料（各年度）をもとに作成

注：農学部所属で専門分野は土壤肥料学。実質、研究会への参加はないことから、メンバーに含めていない

次に、GIAHS 研の活動として定例化しているもの（月例研究会、年度末の研究報告会の開催、研究報告書の作成、その他各種講演会での講演、年1回の比較的大掛かりな現地視察）についてみてみよう。

月例研究会は、主にメンバーの研究進捗報告とその時点での懸案事項の検討が行われている。参加者は、概ね10名前後である。特に担当は決めていないが、2～3の研究進捗の報告がある。テーマは、表2に示したように、多様である。対象への接近方法から大きく分ければ、GIAHS 全体をどのように捉えるかを整理したり、社会組織の姿を描き出したりする人文科学からのアプローチ、農林複合経営の意思決定などを中心に分析する社会科学からのアプローチ、生産基盤に関する定量データや地域資源の客観的評価を中心とした自然科学からのアプローチとなる。

研究報告会の報告タイトルなどは、表3にまとめているとおりである。2016年度は、ゆめゆめプラザ・TAC（高千穂町）で開催された（2017年3月）。協議会、高千穂高校、宮崎大学の三者協定を同時に行ったこともあり、一般市民にも開いたかたちで実施した。2017年度は、西臼杵支庁（高千穂町）で開催し（2018年3月）、協議会や5町村、西臼杵支庁、JAといった関係者を対象とした。2018年度も、前年度とほぼ同様の関係者を対象に、報告者を絞って、五ヶ瀬町において開催する予定である（2019年3月）。

表3 研究報告会の報告タイトルと報告者

年度	報告タイトル	報告者
2016 ^{注1}	研究会の趣旨とテーマについて	早川
	農林複合経営は高千穂郷・椎葉山地域の特徴と言えるか？	藤掛
	見えてきた！高千穂郷の山腹水路のすごさ	竹下
	釜炒り茶の潜在的需要を探る	西
	フォレストビアの経験を共有する	大地
2017	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の実態把握 (I) 社会組織の位置づけ	芦田・早川
	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の実態把握 (II) 量的把握	藤掛・早川・芦田
	GIAHS 地域における集落社会基盤・地域資源の実態把握 (III) 質的把握	大地・芦田・藤掛
	神楽の継承と現代的意義：高千穂郷椎葉山地域における 神楽奉仕者・奉納実態調査結果より	井上
	土壌化学性からみた椎葉村日添地区における火入れの効果	近藤・佐伯
	世界農業遺産地域の肉用牛生産及び家畜市場の特徴について	撫
	消費者行動の特性が釜炒り茶の購買行動に与える影響分析	西
	用水路の地理空間特性指標を用いた GIAHS 地域山腹用水路 の特徴について	竹下
	GIAHS 地域における林内路網の特徴と他地域の比較	櫻井
	GIAHS 地域における戦後の山間地農林複合システムの展開	藤掛・鳥越まゆ ^{注2} 大地
ニホンジカの個体数密度と林床植生の分布から見た宮崎 GIAHS の特徴：「伝統文化継承による森林と農地の賢明な 利用システム」の理解に向けて	西脇	
生物多様性に関する取組について	楠本良延 ^{注3}	

注：1) 前後に、フォトコンテスト表彰式、三者連携協定調印式が行われた

2) 農学部学生

3) 農業・食品産業技術総合研究機構農業環境変動研究センター上級研究員

表4に、各年度の研究報告書のリストを示す。報告書のタイトルは、いずれも「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域に関する研究報告書」であり、2017年3月と2018年3月に印刷し、関係者に配布している。2018年度も同様に、研究報告書を印刷する予定となっている。2016年度と2017年度を比較してみると、新たな研究者を加えて不足していた研究領域を充実させていったことが分かる。また、内容も充実し、2部構成とするほど多様なテーマが扱われており、研究が大きく進展してきている。表2にも示したとおり、2018年度は個別の研究を深化させていくとともに、研究成果を社会に還元していくことも視野に入れており、新たなステージに入りつつある。

表4 宮崎大学 GIAHS 研究会報告書の構成

年度	章	章タイトル	執筆者
2016	1	全国における農林複合経営卓越地域の抽出と GIAHS 地域の特徴	藤掛
	2	GIAHS 地域における棚田および山腹水路の歴史と地形的特徴に関する研究	竹下
	3	土壌分析による焼畑農法の評価	近藤・佐伯
	4	GIAHS 地域における茶業経営に関する調査	西・狩野
	5	社会組織：GIAHS 地域における集落社会基盤地域資源の概況把握	早川・芦田
	6	フォレストピアの経験を共有する	大地
	7	高千穂郷・椎葉山 GIAHS 地域における神楽等伝統文化の継承	井上
第 I 部 GIAHS 地域における遺産的価値の把握			
2017	1	集落社会基盤・地域資源の実態把握 (I) 社会組織の位置づけ	芦田・早川
	2	集落社会基盤・地域資源の実態把握 (II) 量的把握	藤掛・早川・芦田
	3	集落社会基盤・地域資源の実態把握 (III) 質的把握	大地
	4	土壌化学性からみた椎葉村日添地区の焼畑における火入れの効果	近藤
	5	ニホンジカの個体数密度と林床植生の分布から見た GIAHS 地域の特徴：「伝統文化継承による森林と農地の賢明な利用システム」の理解に向けて	西脇・岡部友哉 ^註
	6	山腹用水路の地形的特徴の解析と他地域との比較	西, 狩野
	7	林内路網の特徴と他地域との比較	櫻井
第 II 部 GIAHS 地域の持続的発展に向けた検討			
	8	戦後の山間地農林複合システムの展開	藤掛・鳥越・大地
	9	消費者の嗜好が釜炒り茶の購買行動に与える影響	西
	10	肉用牛生産及び家畜市場の特徴	撫
	11	神楽の継承と現代的意義：奉納実績・神楽奉仕者属性調査結果報告	井上

注：農学部学生

現地視察としては、先述の諸塚村（2016年2月）のほか、岐阜サイト～静岡サイト（2017年2月）、大分サイト（2018年2月）を訪問し、他地域のGIAHSの取組について視察や調査を行った。2019年2月にも、徳島サイトへの現地視察を計画している。

GIAHS研の運営にあたっての連絡・調整役は、2016年度までは早川が担ったが、転出に伴い、西が引き継いだ。また、協議会との連絡・調整やGIAHSをとりまく情報整理を県職員（新農業戦略室）が行っている。

なお、予算については、2016年度は先述の戦略重点経費「高千穂郷・椎葉山世界農業遺産地域が持つ地域資源の再評価・体系化と地域活性化戦略の構築」（研究代表者：藤掛、997千円）と世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会（以下、協議会）からの受託研究「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域に関する研究」（研究代表者：藤掛、2,868千円）を獲得した。2017年度（研究代表者：藤掛、2,334千円）、2018年度（研究代表者：西、2,768千円）も協議会からの受託が継続している。

2. GIAHS研究会の取組をきっかけとした波及的な動きや新たな着想

2.1 地域へのフィードバック

GIAHS研の調査・研究にあたっては、地域の方々（5町村職員や県職員、森林組合やJAの職員、農林業者をはじめとした地域住民など）の協力が欠かせない。ここでは、地域の方々へのフィードバックについて、紹介しよう。

GIAHS研主催のものとしては、先述の研究報告会を実施してきた。2018年度の協議会総会においても、2017年度の研究要約を報告した。また、すでに何度かふれているが、2018年度は、出前講座プログラムの構築、中学生向けのGIAHSに関するリーフレット教材の開発に着手した。出前講座プログラムは、図1に示すとおり、関係組織や集落から依頼があることを想定して10のメニューを用意している。リーフレット教材は、見開き2ページで1テーマを紹介する形式で、中学生の副読本として活用されることを想定している。2019年3月までに印刷される予定である。

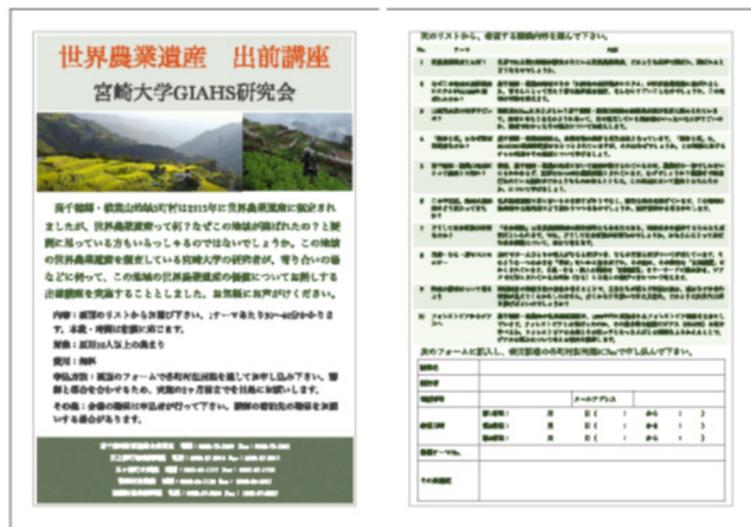


図1 世界農業遺産出前講座チラシ兼申込用紙（左：表面，右：裏面）

そのほかに、協議会主催で GIAHS シンポジウムや各種 PR イベントが不定期開催されているが、これまでに、複数のメンバーが講師やパネリストとして登壇し、研究成果を報告する機会を得ている。また、地域内の高千穂高等学校の生徒を対象に、地域内の NPO 法人グローバルアカデミーが行っている「GIAHS アカデミー」の取組にも、複数のメンバーが講師として協力している。

これらの動きは、GIAHS 研がなければ実現するのが困難だった地域とのつながりであり、調査・研究の進展を加速させることをも期待される。また、研究が進展すれば、教育への活用可能性も拡大していくことであろうと考えられる。

2.2 新たな着想－筆者の経験－

ここでは、およそ 3 年の GIAHS 研の取組を通じて、研究者自身にどのような変化が起こったのか、筆者の経験をもとに記述していきたい。筆者の内面的変化と他のメンバーの変化が一樣ではなく、一般化するには無理があるだろう。さらに、記憶に頼りながら記述しているため、やや正確性に欠ける面もある。その意味で、推測の域を出ていない点もあるかとは考えるが、試論として捉えていただくとありがたい。

筆者は、GIAHS 研での活動を始める以前から、茶業経営研究に関心を持っており、茶工場再編を通じたブランド再生や緑茶のマーケティングについての調査・研究を行った経験があった。高千穂郷・椎葉山地域に調査に入っていくと、釜炒り茶が多く存在している（ほとんど煎茶が存在しない）要因について、大きな関心をもった。国内の緑茶市場は、ほとんどが煎茶であり、全国的にみてもまとまった地域に釜炒り茶が残っているのは珍しいためである。一方で、全国的に希少であるにもかかわらず、主な流通先である地域内で価格を確認すると、安すぎるという印象ももった⁽⁴⁾。

当初、釜炒り茶の残存の理由については、以下のような仮説をもっていた。ひとつは、全国的に釜炒り茶から煎茶に切り替わってきたタイミングに投資をすることができなかったのではないかというもので、もうひとつは、同様の時期に情報がうまく入ってこなかったのではないかと、いうものであった。その後、調査を重ねていくと、五ヶ瀬町では一度煎茶に切り替えたことがあったが、地域の需要に合わなかったので釜炒り茶に戻したという資料があったり、農家によっては煎茶への切り替えを検討したり、という話もいくつかみられた。つまり、地域内流通が主であったことと、その需要に適合してきた結果として釜炒り茶が残ってきたことが想像される。ここまでは、単独で調査・研究を続けていたとしても、ほぼ同じスピードでたどり着ける仮説の修正である。問題はその後、では、なぜ全国で煎茶が受け入れられてきたのに、この地域の消費者は好まなかったのか、という点についてはよくわかっていない。

GIAHS 研における月例研究会では、多様な専門分野から、この地域の特徴が描き出されていくが、上記の疑問を考える際にヒントになった点はいくつかある。

当初、筆者は、大規模な茶業経営にばかり関心が向いており、茶業生産は西臼杵地域（五ヶ瀬町、高千穂町、日之影町）が中心と考えていたが、東臼杵地域（諸塚村、椎葉村）にこそ、GIAHS 地域の釜炒り茶らしさが残っている、という気づきである。それは、農林複合経営という GIAHS 研の中心的な研究対象をみていくなかでは必然的な気づきではあったが、自身の当初の関心からは直接たどりつきづらかった。また、これと関連して、小規模な茶業経営や自家用の栽培しか行わない農家にも関心が向くようになった。この地域における農業あるいは生

業の歴史を振り返ってみると、比較的近年まで焼畑が行われていたり、ヤマチャを利用していたりする。筆者が、単独でこの事実を知ったとしても、「そういう歴史があった事実」を認識するだけで、産業化していない茶業経営にそれほど関心をもたなかったであろう。しかし、専門分野の異なる研究者の存在によって、「焼畑の後にチャが旺盛に萌芽する」といった事実にも関心が向くようになったし、その事実が「なぜ全国で煎茶が受け入れられてきたのに、この地域の消費者は好まなかったのか」という新たな問いに答えるヒントになっているかもしれない、ということにも気づいた。さらに、地理的特性やそこから予想されるあるいは記録に残っている行商人等との取引の歴史も、この地域の茶生産や流通に影響を与えていたことが推測されてきた。

さきほどからの問いに答えるためには、この地域の歴史についての状況証拠を集めながら、推論を重ねていく必要がある。そこで、ヤマチャへの関心についてもふれておこう。5町村の各地を回っていると、場所によってはかなりまとまった範囲で栽培されていないチャが生えている。かつてヤマチャとして利用されたものなのか、茶園が放棄されたものなのかはともかく、地域の人々の生活の近くにチャがあったことはうかがい知ることができる。チャの起源地に関しての筆者の当時の知識は、「日本にも在来種があるかもしれない」で止まっていたが、近年の研究（遺伝子の解析）によって、ほぼ外来のものであることは確定しているという事実、これと併せてタネが重いのでそれほど移動しないという事実にもふれられたことで、GIAHS地域の茶業生産あるいはヤマチャ利用の変遷を考えるうえでは大きな気づきとなった。今後どのように進めていけば、この地域における釜炒り茶の歴史や消費者の嗜好の形成に関して明らかにしていけるのか、現時点では定かではない。しかしながら、これが従来までの個人的な研究であれば、関心をもたなかったか、あるいは明らかにすることを早々にあきらめていたと考えられる。

以上のように、自身の専門分野と他の専門分野の交流によって、筆者の内面では、これまでに考えもしなかったようなアイデアが生まれてきた。なかば定型化している自身の専門分野における研究活動の際に受けるものとは異なる刺激によって、知的好奇心がわき起こり、たとえば、調査において質問する内容も徐々に変化してきている。ヤマチャをいつまで利用していたのか、自宅での釜炒りをいつまで行ってきたのか、なぜ茶摘みをやめたのか、こういった質問は以前ならば、決してすることはなかっただろうと想像できる。

GIAHS研での研究活動が、筆者にとって、どのような効果をもたらしてきたか、ということを考えてみると、最も大きな変化は、複眼的な視角の重要性を再認識できたあるいは体感できたということである。複眼的な視角が重要であることは、地域学部の教員であれば、誰もが認識はしているはずであるが、ただ認識しているということと、それを実体験としてもつということとは大きく意味が違う。我々のほとんどは、専門分野に特化した教育を受けてきたうえに、同質性の高い研究者で構成される学会で研究業績を積んできている。それは、専門性を高めるといって一面においては、有効であるし、正しいキャリアの積み方であるといえる。上記の茶の例でいえば、市場に流通しているもの以外を捨象して経済活動をみていくことが、産業としての茶業を研究対象としてあつかううえでは重要なことである。むしろ、自家用の茶を気にしては研究の進展の妨げでさえあるかもしれない。しかしながら、一方で、この地域の農林複合経営を考えていこうとしたときに、あるいはGIAHS全体をシステムとしてとらえようとしたときに、一面的な対象の観察のみでは「茶業」が非常に狭く映ることになり、これが

研究者の目を曇らせる要因ともなる。

3. GIAHS 研究会の取組が異分野連携研究に与える示唆

ここまで、GIAHS 研のこれまでの経緯やその後の波及効果、筆者の経験などをみてきたが、異分野連携研究にいくつかの示唆を与えていると考えられるので、それを振り返ってみたい。

第1に、リーダーシップをとることのできる研究者の存在である。GIAHS 研においては、藤掛が新たに着任した地域学部の教員に対して、研究の交流をしないか、ともちかけたのがきっかけで、当初はインフォーマルな組織が立ち上がっている。具体的な共通の研究対象がないときから、定期的に積極的な情報交換を行おうとしてきたし、GIAHS 研の始動後も、異なる専門分野の報告に真摯に耳を傾ける姿勢がメンバーの協力も引き出してくれている、と考えている。

第2に、リーダーやグループのやりたいことを具体化し、提案していく事務局の存在が挙げられる。特に、初代事務局の早川は、GIAHS の話題をもってきた張本人でもあり、積極的な研究会の開催、現地視察の企画、研究報告会のとりまとめのほか、連絡・調整役を自主的に行ってきた。現事務局の筆者は、早川が構築した年中行事をなぞっているだけにすぎず、その尽力にただ感謝するのみである。また、地域との連絡・調整役を担っていただいている県職員の対応も迅速で正確であり、こういった協力がなければ、ここまで継続した活動になりえなかったかもしれない。

第3に、研究会の定例化である。すなわち、「予算を獲得して、あとは各自が個別に研究をし、年度末に研究成果を持ち寄って、終わる」という、いわば形式だけの共同研究ではなく、異なる専門分野の研究者同士で分からないことがありつつも、研究のプロセスから共有する場をもつということである。正直なところ、初期のころは理解できない内容も多く、いまでも完全に理解できるわけではない。ただし、コミュニケーションを重ねるにつれて、どんな小さなことでも質問したり、行き詰っている報告者には自分の分野からのアプローチを紹介したり、と徐々に建設的な意見交換、議論の場へと変化したように記憶している。これは、報告者にとっても、その場にいる他の専門分野の研究者にとっても非常に有益なことであり、異分野連携の状態が異分野融合の状態に近づいていくために必要なプロセスのようにも感じる。

第4に、共通の研究対象をもつことである。GIAHS 研の場合には、高千穂郷・椎葉山地域という共通の調査地域ということになる。異分野の研究内容を聞いても徐々に理解できるようになるのは、共通の調査地域に入っており、現場の感覚が共有されているということに依るところが大きいと考えられる。また、知っている地域のことであれば、異分野の話聞いてみようという姿勢もつくられやすい。これもまた、異分野連携がスムーズに進んでいくことにとって、非常に有効な要素ではないだろうか。

第5に、報告の義務化である。GIAHS 研では、年に一度、研究報告会を開催し、研究報告書を印刷している。メンバー全員にとっての義務というわけではないが、一年間の成果を報告する場があるということが、ひとつのモチベーションとなっているとはいえよう。

おわりに

以上、宮崎大学 GIAHS 研究会のこれまでの取組を整理し、異分野連携研究のあり方について考察してきた。地域学部においては、異分野連携研究が志向されてきながら、GIAHS 研ほどの規模で継続的に調査・研究活動を行っている例は、(あったとしたら申し訳ないが) いまだないであろう。異分野連携研究が継続的に実施されていくためには、中心的な役割を担う人材(リーダーの存在とリーダーシップの発揮)が必要なことはもちろんであるが、定期的なコミュニケーションを意識的に作り出す(研究会の定例化と事務局機能)、同じ研究対象をもち、かつ対象への理解を共有する(異分野理解の姿勢づくり)、報告する場をもつ(報告の義務化)などの工夫が有効そうであることが、GIAHS 研の例を通じて得られた示唆であろう。

地域学部の異分野連携研究について、本稿で得られた教訓を現実的に適用しようとする、先立つものとしての予算の有無も重要であるが、ひとまずできることから取り組んでいくべきである。まず、予算がなくとも大学の周辺地域(木花、清武、青島)での調査・研究であれば、すぐにでも取り組んでいくことができそうである。地域理解実習(1年前期)の実習地でもあるこれらの地域を研究対象とすることは、今後の教育を考えていく点からも最適ではないだろうか。本稿の結論として、「木花、清武、青島などの大学周辺地域において、地域学部全体をあげて、異分野連携研究に取り組み始めること」を提案しておきたい。

最後に、異分野連携研究やそれに基づいて構築される異分野連携教育を効果的に実施していくためには、何よりも相互の分野に対する正しい理解や尊重が不可欠であることにも、あえてふれておきたい。

注

- (1) 発足当時、教員数は24名(うち、実務家教員8名)であったが、これに対して専門分野も24という、専門分野にひとつの重複もない教員組織によって構成された。
- (2) 異分野融合や異分野連携、学際という用語は、区別して使用していかなければならない。しかしながら、地域学部においてこれらの用語の使い分けについて、議論が尽くされているとはいえない。そこで、本稿では、便宜的に以下のような使い分けをしている。「異分野連携」は、共通の目的に向かって複数の研究者が各々の専門分野の知見を活かして協力しあう状態、「異分野融合」は、異分野連携の状態から個々の研究者が他の専門分野の知見を自身の専門分野にフィードバックしながら取り込んでいく状態、「学際」は、いくつかの異なる学問分野がかかわること(広辞苑)としている。以上から、異分野連携と学際にはそれほど違いがないと考え、また、異分野融合である状態というのは、めったにないと考え、学部の理念として用いられている異分野融合教育という意味に用いる以外には、原則として「異分野連携」の用語を使用している。
- (3) 2018年度も、一部では講義間の連携が意識されているものの、具体的な共有には至っていない。情報・数量スキルR、大学教育入門セミナーR、専門教育入門セミナーRは、担任・副担任の担当科目であり、担当教員が毎年入れ替わる。科目に固定されている教員がかなり意識的にコミュニケーションをとっていかなければ、継続的な体制とはなりえない。
- (4) この点に関する共同研究も開始しているが、本稿では詳しくはふれない。また、別の機会に紹介したい。